

# 立花隆

＋東京大学教養学部立花隆ゼミ

石弘之 立花隆 加藤登紀子 米長邦雄 真智・F・デイルワース

和波孝禧 秋山仁 神谷郁代 大杉正明 小川三夫 佐々木力

山崎章郎 赤川次郎 糸井重里 橋爪大三郎 小松正規 二本

てるみ 萩尾望都 佐藤学 鬼沢修二 坂本龍一 吉永良正

安倍美知子 野田秀樹 福島瑞穂 西和彦 古川昭夫 滝本太

郎 樋口可南子 日比野克彦 永沢光雄 成瀬豊 ヘンリック・グル

デモ 元オウム真理教信者 阪口浩一 バーテンダー 水島涼子

あとがき 立花隆 おわりに 立花ゼミ編集責任者・中村義哉

【文庫版】モーニング娘。飯田圭織 安倍なつみ インタビュー「二十歳になって。」

付録・昭和史略年表 取材者一覧

# 二十歳の

はたち

# ころ

Ⅱ

1960  
～  
2001

立花ゼミ

『調べて書く』

共同製作

新潮文庫

んかやつぱり私泣いてしまいましたね。悔しいとかいって。人前で平然と、苛められた、悔しいとかいって泣いてました。

### 最後に

「男の人だって女の人だってみんな悩みを抱えているし、みんな寂しいんだよ」という彼女。ブラウン管の中の姿しかしらなかったもので、意外な言葉に思えた。母親、恋人、いろいろな仲間……といった自分を支えてくれる人たちと上手につきあって、甘える所は肩ひじ張らずに甘えて、自立すべき所はしっかり自立している。現代のスーパーウーマン、福島瑞穂さんはとてもバランスよく生きている人のようでした。

取材日 一九九六年九月九日

### 【取材・執筆者】

田中英資 \* 中沢佳子

Kazuko Nishi

## 西和彦にきく

株式会社アスキー特別顧問。一九五六年二月十日生まれ。二十歳は早稲田大学理工学部機械工学科一年在学中に迎える。二十一歳の時に、アスキー出版（現アスキー）を設立。二十三歳でマイクロソフト極東担当副社長に就任するなど、早くから活躍。「ソフトバンク」の孫正義氏と並んで、日本のベンチャー企業起業家の雄として知られた。

——二十歳のころのお話を。

僕、浪人しているんですね。十八の頃は浪人していた。暗かったな（笑）。十九歳になつてすぐのときに早稲田に入学したから、二十歳は一年生の終わりで……ちゃんと学生してましたよ。実験したり、レポート書いたり、そういう学校の勉強もしつつ、一方ではつまらなさも感じていて、それで航空部に入った。航空部に入つて、グライダーに乗っていたね。夏も秋も冬も合宿に行つて、上級生に殴られながら、「なんでこんなことしな

くちやいけないのか」と心に思いつつ、空を飛んでいた(笑)。

その他には、当時ミニ・コンピュータというのがあったので、それにつながる機械を作っていました。将来はロボットを作りたくて、早稲田にはロボット研究室というのがあったので、そこに出入りさせて貰って、ロボットとコンピュータをつなぐ、という風なことをやっていました。

今のようなコンピュータなんかまだなくて、マイクロコンピュータが出始めた頃かなあ。チップを見ながら、

「みんな、これがマイクロだって」

「はーっ」(目の上にかざして)

「この中に入っているのか」

「はーっ」

「ちよっと開けてみようか」

「開けたらつぶれるぞ」

「開けてみたら、電子が流れているのが見えるのかな」

「見えたらいよいよね」

「電子顕微鏡だったら見えるのかな」

「電子の玉突きになるかもしれん。どうしよう」

そんな感じでしたね。だから、君達くらいの歳に、会社に行って、話を聞いて、なんて風ではなかった。内気でシャイで、上級生の言うことは「ハイッ」て聞いて……。あと本はたくさん読んでいた。自分で言うのも何だけど、二十歳の頃に小説でも書いていたから、売っていたかもしれない。今は小説ではなくて、『社会とメディア』みたいなことをやっているけれど、当手を振り返ってみても、非常にセンシティブというか、感情の豊かな、けれどあまり喋らない、いい子だったと思います(笑)。

——感性というのと、その頃作曲されていたそうですが。

うん、そう。シンセサイザーとコンピュータをつないで、コンピュータ・ミュージックのはしりみたいなものをやっていたわけ。今はみんなやっているでしょう。難しそうだけど、実はすごく簡単なもの。当時コンピュータ・ミュージックをやる連中の間では、曲を一小節ずつ抜いて演奏するとか、最後から演奏するとかいうのが流行っていたから、僕もバツハの曲とかを入れて、逆さに(後ろから)演奏したりしたの。それを何百回と聞いたから、今でも僕はバツハのメヌエットを逆から演奏できるよ。

まあ、逆さまだからといって、何かに反抗する意志があったとかじゃなくて、自分が興味を持った世界を育てよう、面白いことをやろうっていう感じでしたね。

——子供の頃からロボットを作りましたか？

あのね、小学六年生の頃、京都の光悦寺こうえつじだったかなあ、秋の紅葉が綺麗きれいなところに行つて、それを見ながら、「紅葉っていうのは、色素が変わつてこうなるんだ」と言い、甘酒を飲むという時になると、「甘酒というのは、発酵によつてできる。同じ現象に腐敗というのがある、人間の役に立つのが発酵、役に立たないのが腐敗。でも、まあ、甘酒を飲まない人にとっては、このお酒は腐敗しているのかなあ」と言ったら、母親にほつぺたをバシッと殴られて（笑）、「こういうものを見て、そんなことしか言えないのか。あ、情けない」と怒られる。でも、「何が悪いんだろう」とボケーツとしていて……。結構ハードコアな科学人間だったね、その頃は。ロマンチックというよりも、ドリーミングな夢想家だったんでしょねえ。「ああいう風になると面白いかも」とかいように、夢を考えるのが好きだった。

両親が私立の学校を経営していて、教育の世界で一番偉いのは文部大臣だから、「文部大臣になりたい」とか思っていた。その次は、「SONYの研究所で働きたい」と。高校の時は、大学の先生になりたいと思っていた。それは、高校の先輩が大阪大学に行つていて、「君、大学に遊びにおいで」と言ってくれたので、大学の研究室に遊びに行つたん

ですよ。それで、大学も面白そうだと思った。それから、メーカーに勤めるのもいいかなって思っていた。それが不思議なもので、会社を始めることになっちゃった。

——二十歳のころ、アルバイトなどはなさっていましたか？

家庭教師をしていました。理科を教えていてね、生徒の教科書をバラバラ読んで、「こんな面白くない、やめよう」と言つて、アメリカの理科の教科書を買つて来て「これ、やろう」と言つて始めた。「宿題は次の5ページまで」とか言つて、次までにやつてなかったら、「ちゃんとやれ」と、怒った（笑）。「何か質問ない？」と聞いて、「別にない」って言ったら、授業を終わつて。実にいい加減な家庭教師でしたね、僕は（笑）。「成績は関係ない」と向うの親は言っていたから、理科を好きになつてくれればいいと思ったのね。

——好きになつてくれましたか？

うん、今そういう関係の仕事をしているみたい。

——会社をやることになったのは、何がきっかけだったのですか。

「早稲田大学インフォメーション・ソサエティー」というコンピュータ・クラブにも入っていて、その頃、「原稿書きませんか」と言われて書いたら、ボツになったの。なんでボツになったかというと、一般には難しそうに思われることを遊びっぽく書くから。そのうち、そういう原稿がたまったら自分で出そうと思つてね。それで、「どうせやるなら会社でやろう」と思つて、それで始めたんです。最初からまあまあうまくいきましたね。結構面白かつたし。それに、自分が好きでやっていることつて、どんどん勉強するじゃないですか。

二十歳のころⅡ 1960-2001

——二十歳という時期は、人格形成にとって大切な期間だと思いますが……。

失敗・反省はいっぱいしたけれど……。恐らく、君達はこちらから二つのことを経験するでしょう。一つは、「自分はこういう人間か」ということに目醒めるということ。もう一つは、自分よりもっと大きな存在、大きな力、神様みたいなものかどうか分からないけれど、そういうものに気付く時が来ると思います。若い頃は、自分の理性や知性で何でもできるって思いがちじゃない。でも、自分の理性や知性だけではどうしようもできな

い時が必ず来ます。自分が努力をすれば何でもできるというものではない。自分は守られていてとか、すごく運がいいからできるとか、そういうことに気が付くときがくるでしょう。僕が自分に気付いたのは、二十五歳か二十六歳の時。神様に気付いたのは三十歳過ぎたあたりかなあ。

——西さんが一番大切にしているものは何ですか。

うーん、その瞬間、「今」かなあ。極めて刹那的<sup>せつな</sup>だけど。「今」の集積が「過去」になつていくんじゃないですか。だから、「今」はすごく大切だね。あのね、旅行に行くじゃない。何が最高のおみやげか知つてる？

——うーん、みやげ話ですか？

そう、当たり。一番のみやげは、みやげ話なんだよ。「こんなことがあつて、こんな面白い所があつて……」つていうのが旅行の一番いいところだし、聞く方も、それが一番面白い。仮に何百億円持っていたとしても、それ持ってお棺<sup>かん</sup>に入れないでしょ。臨死体験つてあるじゃない。僕は、魂というのはあると思うの。だから、死んでから、生きて

西 和彦にきく

いた時に面白かった話とか、そんな冥土<sup>めいど</sup>へのみやげ話がたくさんあれば、楽しい人生だったということだと思っね。

——もう一度二十歳に戻るとしたら、どうなされますか。

人生は一度しかないから、振り返ってどうこうは、考えない。<sup>Why</sup>は未来にしかないし、僕は思っんです。過去には“<sup>Why</sup>”しかない。そう考えたら楽しいよ。どうしてかという<sup>Why</sup>は死ぬまで無限に来るし、その選択肢も無限に来るから。例えば、この世界に一億五千万人の適齢期の異性がいるとしたら、その一人にフラれても、まだ一億四千九百九十九万九千九百九十九人の選択肢というか、可能性がある。「フラれた、フラれた」って思うより、あとそれだけの人と付き合う可能性が出てきたと思う方がハッピーでしょ。寝る時にも、明日出来ることが百個くらいある。いろいろなことが出来て、その中から何をしようって、考えるだけでも楽しいじゃないですか。まあ、実際には僕もフラれてがっかり、浪人してがっかり、だったけどね（笑）。

“<sup>blessing in disguise</sup>”（形を変えた神の祝福）ってという言葉があるんだけどね。辛いことでも、とにかくやってみてよかったと思えること、あるでしょう。こう考えると、「何とかなるんじゃないか」と生きていける。二十歳の頃にはいろいろ失敗したけれど、損

になるような経験は、何一つしていない。何かを経験しながら、「これは自分にとってどういう意味なんだろう」って考えて生きればいいんです。例えば、お金がないなら、「自分はお金がないことから何を学ぶんだろう」とかね。それによって自分の人間としての生きている値打ちが決まると思っんです。

取材日・場所 一九九六年九月十三日・渋谷区のアスキー本社にて

【取材・執筆者】

齊藤淳 中林徳人 \*中村義哉 李智雄 若原拓哉